

## 宮ヶ浜：指宿発祥の地

少なくとも縄文時代（紀元前 10,000 年～紀元前 300 年）から、人類は現在の指宿市周辺に住んでいた。この地域の初期の住民は、歩き回る狩猟採集社会と小さな集落を築いていた。しかし、現在の指宿市そのものは、874 年の大災害の産物である。

その年、半島南端の開聞岳が噴火し、半島全域の村々が火山灰と瓦礫に埋もれた。生存者は被害が少なかった指宿市北部の宮ヶ浜に集まり、やがて集落が形成された。

1100 年代から 1400 年代後半まで、この地域は、かつて現在の九州の大部分を支配していた有力な薩摩家の分家である指宿家によって統治されていた。指宿氏は宮ヶ浜の近くに権力の座を築き、賑やかな港町に変えた。

しかし、宮ヶ浜の水深は浅く、岸近くに安全に停泊できる場所はない。大型船は沖合に停泊し、小さな船で陸まで物資を運ぶしかなかった。適切なインフラが整っていないため、密輸を防ぐことは困難だった。1833 年、薩摩藩主は長さ 230 メートル、高さ 5 メートルの防波堤の建設を命じた。防波堤は火山岩で築かれ、1 年で完成した。雁岸と呼ばれるこの防波堤は、湾の水を穏やかにし、大型船の沖合係留を可能にした。この建造物は現在も残っており、国の

登録有形文化財に指定されている。

こうしたインフラを背景に、この地域は江戸時代(1603-1867)のおわりまで重要な貿易港であり続けた。日本の近代化とともに、政治、教育、経済の発展機構はかつての城下町に集約され、現代の指宿の中心的存在となっている。19 世紀から 20 世紀にかけての建造物が数多く残っており、その中には国の登録有形文化財も含まれている。